

記念講演 演題 「美しい姫路 その景観をいつまでも」

講師 永田 萌



プロフィール

ながた もえ
永田 萌 姫路市立美術館長

出版社などでグラフィックデザインの仕事に携わった後、1975年にイラストレーターとして独立。豊かで美しい色彩から生み出される独特のファンタジーの世界は、国内外を問わず広く親しまれている。画集やエッセイなど、これまでに約160冊余を出版。一方、広告媒体や企業商品等の商業美術の他に、公共機関に設置される陶板画や舞台ホールの緞帳など作品の展開は幅広い。日本郵便発行の切手もこれまでに39種を制作した。国内約200会場での巡回展のほかに、デンマーク・台湾・フランスでも作品展を行い、可能性を開き続けている。

また教育や子育て、街づくりをテーマに講演会講師や委員会委員をつとめる機会も多い。2016年より京都市子育て支援総合センターこどもみらい館館長、2018年より姫路市立美術館館長を務める。兵庫県加西市出身、京都市在住。

皆様、こんにちは。ただいまお心のこもった御紹介を頂戴いたしました永田萌でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

姫路市立美術館館長ということで、このお役目を申しつかりましたが、もとより景観の専門家ではございませんので、どれほどお役に立てるお話になるかは心もとない限りなのでございますが、私、中学・高校と姫路城の東の下、賢明女子学院で過ごしまして、今から思いますと、今のような仕事をする上で一番心が耕されると言いますか、感受性が豊かになり創造力がはぐくまれる時代をお城の下で育ったことは本当に大きなことだと考えております。

ある方がおっしゃってたんですが、幼いときに目にした風景、それは大きくその人の精神生活、心の成長に影響を与えると聞いたことがあるんですが、まさに仰ぎ見る美しい人の手でつくられた建造物の美である姫路城を見て幼い時代を過ごしたことは、今の自分にとって大きな贈り物だったなと考えております。

御縁がありまして姫路に戻ってまいりました。今までも何回か用がありまして姫路市にはお伺いしてたのですが、不思議なことに4月に館長に就任しましてからは、住まいしております京都、もう50年住んでるんですが、姫路は新幹線で参ります。ちょうど新神戸を過ぎますとトンネルがありますので、しばらく海沿いを走ります。明石を越えるころになりますと急に空が広がるんです。ほとんど新幹線の座ってます席の目の位置から空が広がる。皆様方は余り意識されないかもしれませんが、京都のように三方高い山に囲まれた盆地に住んでおりますと本当に空は見上げるようなものなのですが、播州平野は豊かに、

なだらかな山々の裾に広がっておりますから空が本当にきれいなんです。きょうも美しい秋晴れでした。ですから、その秋晴れの空の下に遠く姫路城を見ますと、帰ってきたという感慨が湧いてまいります。

実は昨日参りまして、2日目ですけれども、11月の初めは出張と言いますか、絵の仕事で北海道の十勝平野、帯広に4日間おりました。そして、ちょうど1週間後、戻りまして1日、2日おいてから、この月曜日までは奄美大島におりました。つまり、北の大地と南の島を両方、四、五日を過ごしたんですが、もちろん風景は全く違うんです。

何が違うかと言いますと、帯広の11月の初めは青と黄色の世界です。完璧な青い空と黄色いカラマツの紅葉です。紅葉というのはおかしいかもしれませんね。北海道の紅葉は全て黄色です。オレンジ色がほとんどありません。つまり、カエデとか、カシワの木はあるんですが、あれは茶色ですので。圧倒的にカラマツの黄色の美しい樹形の黄色いシルエットがどこまでも続くんです。全く外国の風景です。

片や奄美大島は全く紅葉というものがありません。ほとんどが照葉樹林の深い山々が連なる、ほとんどが山で埋められてる島ですので、ヘゴという巨大なシダ科の植物とガジュマルがあります。ですから、全く紅葉することがありません。古い葉っぱは落ちますが、また新芽がすぐ出ますので、私たちの目から見ると季節が春なのか秋なのか全くわかりません。春先にもよく参りますが、緑の深さは全く変わりません。これも不思議な光景です。

ですから、日本が、いかに北から南に細長くて、しかも特異な、その土地その土地の景観を豊かに持つ国かということがわかるのですが、この2つの滞在で共通した出来事があります。

それは何かと言うと、台風21号です。奄美大島も大きな被害を受けました。そして、その被害は、皆様も御記憶に新しいと思います。

その直後、北海道は地震がありましたよね。あの時点で山が崩れました。それで、山裾のおうちがその土砂に埋もれたりしましたが、全く同じ風景が奄美大島にもあるんです。奄美大島は地震ではなくて風水害ですけれども、でも同じように山が崩れて、そのむき出しの斜面は、悲しいことに北の北海道も南の奄美大島も同じ光景でした。まさに自然の驚異を目の当たりにしてきたんですけれども、でも人の営みの中に、たびたびこういうことはあったと。どちらの方たちも偶然同じことをおっしゃいました。私たちは負けない。必ずまた、もとの美しさを取り戻すとおっしゃってて本当に心強く思ったのですが、日本という国は天然の自然にも多く恵まれておりますが、やはり人の手の営みによる美しい景観が保たれてる。だからこそ、これほど多くの人が日本にあこがれてやってこられるのではないかなと思っております。

きょうは、主に私が少女時代を過ごしました姫路の美しい景観を中心にしてお話をしたいと思うのですが、私は職業はイラストレーター、そして絵本作家でございますので、これからちょっと会場を暗くしていただいて、もう既にスクリーンを用意していただいております。いろんな資料写真もございますので、まずは冒頭、私の自己紹介を兼ねて、どんな絵を描いているか、多分第2のふるさと姫路ですから、ほとんどの方は、それ知ってる、それ聞いたと思われるかもしれませんが、まずは私も自分の絵を見ていただくとちょっと気持ちが落ちつきますので、そういう構成にしたいと思います。

ちょっと会場を暗くしていただきます。

ごらんくださいませ。これから見ていただく数点は、全て姫路市のために描いたイラストです。私は画家としての歴史は四十三、四年になるかと思うのですけれども、調べてみますと、随分たくさん姫路のために絵を描いております。これなど一番古いのですが、ごらんください。これは自画像のつもりで描い

た小さな絵ですが、妖精が持つてるスケッチブックに姫路城が描かれています。

姫路城、何と言いましても、たくさんの画家がその美にチャレンジして絵画にされるんですが、私のような微力な絵描きから言うと、あんな巨大な美にチャレンジするのは本当に向こう見ずという気がしますので、そんなにしっかり描いたことはないのですが、それでもこんなふうには描いたことはあります。ごらんください。シロトピアのときの記念のポスターです。もうどれぐらい前になるんでしょうね。時間がたつてくることの証明は姫路城にあります。ごらんください。皆さん、姫路城の屋根が黒いですよね。今の姫路城とは全く違います。私の学生時代はちょうど昭和の大修理が終わりかけたころでしたので、それからまた30年ぐらいたった後の作品だと思えますので、姫路城、今よりも屋根瓦が黒いです。

これは当時、担当さんから千姫をイメージした美しい女性のイラストを描いてくださいという御注文を受けました。ですから、私は、いつも花と妖精を描く絵描きですので、この着物姿の美しい女性の背中にある羽はシラサギです。サギの羽です。

姫路市の市の花はサギソウですが、サギソウも姫路市のために2点描いております。ごらんください。これは現在、私が美術館館長の名刺に勝手に使っておりますけれども、私に挨拶して下さったら、この名刺を差し上げますので。

サギソウは難しい花でして、ごらんのように本当にシラサギが空に今にも舞い立ちそうな形をしております。何が難しいかと言いますと、花びらの先端の部分です。細い糸のように切れ込みが入っているのが非常に難しいです。

次の絵もサギソウです。ごらんください。サギソウとサギソウの妖精さんたちです。緑化推進運動のマークも描いております。ごらんください。どこかで見たと御記憶の片隅にあるかもしれませんね。

私はキャリアの最初はグラフィックデザイナーでしたので、こういったシンボルマークもたくさん制作しております。これは比較的古いものですが、めちゃくちゃ新しいものとしては、こういったものがあります。ごらんください。

これは姫路信用金庫さんの「はなちゃんとうたばくん」のキャラクターです。昨年度ですが、同時制作で姫路信用金庫さんのポスターも描いております。ごらんください。これはいろんなところで使われているかと思うのですが、これはファミリーツリーをイメージしております、地元で根差した信用金庫さんですので、代々のおうちを守る私たちの一番身近な銀行ということで、いろんな家族の方たちの営みが受け継がれていくファミリーツリーをイメージしています。なかなか凝っております、二世帯住宅ですよ、これ。上のほうにおじいちゃんとおばあちゃんのおうちもありますけれども。こんな絵を描く絵描きでございます。

もちろん、イラストレーターという仕事はおもしろい仕事でして、描きたいものもたくさんあるんですが、ほとんどの場合は依頼を受けて制作をいたします。ここで見ていただきました全ては、姫路市から依頼を受けて制作したものです。ほかにも何点かあるんですが、こればかりになるといけませんので、このような自己紹介バージョンを踏まえまして、いよいよ本題に入りたいと思います。

さて、姫路市立美術館、皆様にとって一番身近な美術館であろうと思います。私の学生時代は、あの美しいれんがの建物は市役所でした。我が母校は、ちょうど斜め向かいぐらいのところに位置しておりますので、私が郷里の加西市から乗ってくるバスは、ちょうど「市役所前」というところでおりました。ですから、卒業するまで、私にとってあの建物は市役所で、美術館はもっと後のことですので、美しい思い出に残るれんがの建物です。

姫路市立美術館はすばらしいコレクション

をたくさん持っておりますが、大きな特色の一つに郷土の優れた作家の方たちのコレクションをジャンルを問わず多く持っていることです。日本画ですと、最も有名なのは、福崎町で生まれ育った人ですけれども、やはり松岡映丘です。あとは、池田遙邨も一時期姫路に住んでおります。郷土で生まれ育たれて生涯を終えられた方もたくさんおありですが、姫路にゆかりの方のコレクションもたくさん持っております。これはとてもすばらしいことだと思っております。

私もジャンルがちょっと違いますので、美術館に来て改めて勉強させていただき、見せていただいて、そのすばらしいお仕事に感嘆したことがたびたびございます。

洋画では、私の母校の恩師飯田ゼン先生がいらっしゃいます。同じ飯田先生で、勇先生もいらっしゃいますが、飯田勇先生はまさに私たちの美術の先生でした。ただ、きょう、同期生もおりますけど、私たちはほぼ1回も飯田先生に美術の授業を受けたことがありません。美術の時間に何してたかと言いますと、校庭の草むしりをしておりました。

私は長いこと飯田先生は用務員のおじさんだと思ってたんですけれども、日本を代表する洋画家の一人だと聞いてびっくりした記憶があるんです。飯田先生の作品もたくさんコレクションがございます。

日本画では、ほかに、私のとても好きな森崎伯霊さんとか、丸投三代吉さんの大きな作品もたくさんございます。

郷土のすぐれた作家の作品を美術館が大切に守っている。そして、その御家族はもとよりですが、ゆかりの方々が、その作品を通して、今は亡き方々の思いに触れるということは、美術館の大きな役割の一つだと思っております。

ということで、そのコレクションの、すばらしい作家の中のお一人の作品をこれから見ていただこうと思っております。まさにこの方の作品は、きょうのシンポジウムにぴったりでは

ないかと思って、御遺族の御了解を得た上で撮影をさせていただきました。ただ画集から撮っておりますので、オリジナルから直接の撮影ではございません。多少画像が粗いのは残念ですが、でも画家の魂は十分皆さんのお心に届く迫力を持っていると思っておりますので、ごらんください。

まず、作者の御紹介からいたしましょう。作品が出てまいりました。内海敏夫さんです。1918年のお生まれで、たつの市の御出身です。でも、ずっと姫路で過ごされました。2010年に92歳の御高齢で亡くなられましたが、生涯現役の画家として、すばらしいお作品を残していらっしゃいます。お若いころは川端画学校で学ばれたようですが、もともと、私たちにとって内海敏夫さんは、優れた人物画を描かれる、肖像画とか裸婦の名作も多いんですけれども、きょう御紹介する一連のものは、内海先生のもう一方の代表作です。

実は、兵庫の北の豊岡から南の淡路島、兵庫の至るところの民家と町並みを描かれています。2冊御本がありまして、兵庫の民家と町並みは300景、姫路と播州の町並みは200景です。私も播州の出身ですので、加西市の絵も数点ございます。私の知り合いの家がちゃんと描かれていてびっくりした記憶があるんですけれども、ここに出てまいります、御紹介したいと思っておりますのは、特にこの周辺、お城周辺は皆様にとっては非常に御近所の風景です。まず下のほうに先生が描かれた説明があるのですが、それをちょっと判読していただくのは読みづらいかと思っております。簡単ですので、ざっと読ませさせていただきます。

これは、まず姫路の龍野町1丁目。

旧街道の龍野口に当たるため龍野町と呼んで、1丁目から6丁目まで続く。どっしりとした構えの家が多く立ち並ぶ、西の果てに日赤病院が薬師山を背にして建つ。手前は1丁目、今井家裏の酒蔵、今井さんという大きなお宅です。

次をごらんください。同じく龍野町1丁目、

今井家です。

歴史の重みを漂わせ国道2号線の北に残る龍野町筋、戦国時代、姫路城が小規模ながらでき上がっていたころ、既に龍野町は生まれた。道の左の家は今、新築住宅になっている。恐らく、この景観は全く残っていませんでしょうね。

次は、材木町です。南の旧家、やはり今井家です。大きなおうちですね。本当に素晴らしいお宅だと思います。

市之橋を渡って南のほうに下がる。やはり材木町が続く。材木町の旧家、今井家だが、何となく人の気配がない。時代への思いを遮断するように高層のマンションが建っている。

次は、伊伝居です。伊伝居本町裏、船場川という小説を数年かけて3,000枚書いた人がある。舞台になった伊伝居本町、流れは手前を西に向かう。

次は、船場川です。私はこの絵が大好きですが、市之橋から清水橋へ緩やかにカーブしながら中堀と船場川の間を北へ延びる散歩道ということですよ。

最後は、船場川の風景です。ごらんください。

裏が船場川の流れて、片側しか町並みがないので、片町。市之橋から国道2号線を白鷺橋近くまで下がった2階長屋、時代を感じますね。2号線拡張で改造された船場ビルが背後の空にと。このビルはどうでしょう。今でもあるのでしょうか。

それぞれ製作年数もありますが、いずれにしても古く懐かしい風景です。

内海敏夫さんは、もともと、そういった女性や人物画を得意とされる方でしたが、「文芸姫路」という文芸誌がございしますが、そちらの表紙絵を担当されるときに、特に編集長から姫路周辺、それから、幅を広げて、兵庫県下の町並みを写生してほしいと御依頼を受けたようです。

そのうちに先生のライフワークのようになられて、たくさんの絵を残されていますが、

すごくよく、すばらしいと思うのは、まなざしがとても優しいんです。風景を厳しく描くというよりも、そこに住む人たちの暮らしをいとおむような、人の手でつくり上げられた景観を大切に思っらっしゃる画家のまなざしを感じます。とてもすばらしい絵です。これらがほとんどスケッチ、写生として描かれたということに驚嘆いたします。機会がありましたら、ぜひ美術館でもたくさん内海先生の作品を一堂に、それこそ、今は亡き古い姫路の景観を見ていただくような機会をぜひ持ちたいと願っております。

では、ちょっと姫路の古い町並みのお話をいたしましたので、もっと古いものを見ていただこうと思います。ごらんくださいませ。

これ、皆さん、余りに古すぎて何だそれかと思われるかもしれませんが、これは陸軍倉庫時代の赤れんが館と姫路城。つまり、赤れんが館は現在の美術館でございます。こんな風景だったんですね。航空写真で、ちょっと鮮明さにも欠けますけれど、大体お城の周辺の感じはわかりますね。

昭和20年代になりますと、先ほど申し上げましたように、この建物は市役所になります。ごらんください。いかがですか。うちの副館長は、初めて市役所に入所されたとき、この建物だったとおっしゃってました。でも、私たちにとってはとても懐かしい風景です、これ。やっぱり、市役所こんな感じだったなと覚えています。

同じく、年代はちょっと不詳ですが、市役所時代の写真をごらんください。のどかですね。まだ自転車なんかが走っておりますね。でも、市役所から美術館への改修工事が始まります。ちょっとカラー写真が出てまいります。ごらんください。

こんなふうにして、大切に守られてきて、受け継がれてきた建物だなということがよくわかります。58年3月の竣工記念式典は、またモノクロ写真になってしまうんですが、ごらんください。お祝いムードが満載です。で

も、女性はまだ着物の方が多いです。時代を感じます。この景観は、今もほとんど変わりません。正面玄関のところですよ。

では、ちょっと近代の美術館周辺をごらんください。いいですね、きょうも、まさに秋晴れのもと、これらの木が今紅葉しておりますので、庭はまた一段と美しく魅力的な場所になっております。現在はリニューアル工事中ですので館内には御入館いただけませんが、現在も庭はもちろん一般公開になっております。展示物もございますので、ぜひいらしていただきたいと思うのですが、少し美術館周辺の景観についてお話をさせていただきたいと思います。

これは庭を少しぐっと引いた、ちょうど北側の翼になります。非常に細長い建物でして、展示するにはなかなか難しい空間です。もともと美術館として建築されたものではございませんので、みんなで苦労しながら、逆に変則的な場所の美しさ、おもしろさを引き立たせたいと企画を、頭をひねっておりますけれども、ごらんのように姫路城周辺、美術館もそうですが、クスノキがとても多いのです。市のシンボルツリー、市の木はクスノキだと聞いたことがあります。

クスノキはエバーグリーンの常緑樹です。ですから、今の季節でも、クスノキは紅葉を当然いたしません。春先になりますと、古い葉が落ちて新芽が出ます。ですから、古い葉は当然冬の間もずっとエバーグリーンです。常緑を保っておりますので、本当に景観が変わらないんです。しかも、人間は色彩によっていろいろ心が変化する、動くんですけども、緑色はすごく心を安定させる色彩です。新緑はもっと若々しい、わくわくするような気持ちを起こさせるんですが、このクスノキのような深い緑は大きな安らぎ、安心を与えます。そして、クスノキそのものの樹形がとてもいいんです。これから幾つもクスノキが出てまいります。ここに少し出ているものも、ごらんいただくと、こんもり茂という表現が

ぴったりの樹形です。これは絵にしますときも、すごく描きやすいというか、枝を固まりとして表現することができますので、非常にどっしりした重量感が出ます。

この木が本当にお城のお堀の周辺から大手前公園のあたり一帯を埋めておりますので、これは最も美しい姫路城周辺の景観を構成しているものの一つではないかと私は思っております。クスノキです。

じゃあ、もう少しごらんください。この木なんかもきれいですね。伸びやかで堂々としていて、まさに美術館のレンガの外壁によく似合います。どちらもお互いを引き立たせているなと思います。

さて、このクスノキですけれども、当然周辺にも植えられておりますので、次の写真をごらんくださいませ。大分引いてまいりました。これも大木ですね。

もう一枚ごらんください。これは美術館の外側の歩道になります。私の母校はちょうど反対側でございますから、私の学生時代はこのような景観ではありませんでした。本当に帰ってくるたびに姫路城とその周辺、母校周辺が美しくなっていくというのを驚きとともに感心して見ていたんですが。

ここ、自転車で子供さんたちが通ってらっしゃいますね。何げない風景だと思っておりますが、よく見ますとこのクスノキは一列に植えられてるわけではないのです。もう少し行きますとクスノキが真ん中にあたりするんです。ですから、当然自転車の方は、そのクスノキをよけないといけないんです。クスノキが一番端にあるところを回ります。場所によっては、クスノキのために、ちょっと道幅を広げてあるのかなと思うところもあるんです。

これは、私は本当に姫路の人のすばらしさだいつも思うのです。片側には彫刻も美しく配置されていますし、散策路としてもすばらしいんですが、まず先にあるもの、既にあるものに対しての敬意がこの道のつくり方にあらわれてるような気がいたします。これこ

そが景観づくりの一番の基本の姿勢ではないかなと思います。既に存在するもの、それは物言わぬ植物でもそうですが、人の暮らしもそうです。

先ほど野里の街道の景観を保全されてる運動が受賞されておりましたけれども、私の住んでおります京都でも町並み条例、要するに町家を保全することが一番大きな現代を生きる京都市民の役割となっています。

既にあるもの、人の暮らしの営みの中で保たれてるものは、なかなか行政が、ああしてくれ、こうしてくれということ難しいのだと思うのですが、やっぱり、それを、たとえば、そのお家に暮らしていなくても、そのお家に暮らす人の暮らしぶり、京都の場合は角はぎとか言いまして、朝早くからちゃんと、御近所の前は掃かずに、自分の家の前だけを掃くというのがあるんですが、これ、いけずなわけではなくて、変にお隣まで掃いてしまうと気を遣わせるという京都ならではの心配りです。

そういったことも含めて、暮らしの大切さ、脈々として、営々として営まれてきた暮らしの美しさを、やはり景観の一部として、大きな要素として考えているところが、この木のあり方にも共通するように私は思っております。

美術館は、来年春に改修を終わりましたら、いよいよ本格的なリニューアル、再生の時代を迎えます。先ほども申し上げましたようなたくさんなコレクション全てを展示するにはなかなかスペースが足りないのですが、そんな工夫もしてまいります、やはりこの垣根の内側の庭、市長からも、「いろいろ、もっと庭の有効な活用を」というふうにも仰せついておりますが、本当に特別何かをじゃなくても、散策する、そこでゆっくりとした時間を過ごしていただくためとしての緑の空間としても、すばらしい庭園を供えております。そして、赤れんがの建物の後ろには、あの名城、姫路城がそびえております。このよ

うなシチュエーションの美術館は世界に2つとないと、私は関係者でありながら自慢に思っております。

美術館が、これからも姫路市の誇る美しい景観を構成する重要な要素であり続けられるように、外観の美しさはもとよりですけども、内側の充実も、これからはかかっていきたいと思っております。

短いお話になりましたが、景観について、美術館の取り組みなどについても、お話をさせていただく機会を頂戴しましたことを本当にうれしく思っております。

少し質疑応答をとということをお願いしております。予定よりやや短めですが、これでひとまずお話を終わりたいと思います。御清聴ありがとうございました。

(質疑応答)

○質問者 いつも絵を楽しみに見せていただいています。ありがとうございます。

永田先生は京都にお住まいだと思うのですが、京都と比べて姫路のとてもいいなと思うところがどこか教えていただけたらと思います。

○永田 萌 いっぱいあるんですけど、何と言っても台風が来ないところ。ことし、21号のとき京都は大変だったんです。私は上賀茂と言いまして、三方が山のちょうど北を塞ぐ山の麓に住んでいるんですが、本当にあんな恐ろしい思いをしたことはありません。かわら屋根は飛びますし、大きな木は本当に音を立てて倒れました。姫路へ来ましたら、お城の周辺何ともないじゃないですか。やっぱり、これは土地の神様に守られてるというか、地形だけはいかんともしがたいものがありますね。奄美大島の人たちなんて、必ず台風が通るんですから。

それを思うと、この播州平野の豊かさ、実りもそうですが、やはり地形のすばらしさ、本当に姫路駅におりまして真正面に世界遺産のお城が見えて、世界遺産が目の前にそびえていて、大きな道路があるじゃないですか、あれもいいですね。都市の美しさ、まさにここに極まってるという感じがします。京都駅なんかおいても何も美しくないんですよ。本当に京都駅は大失敗だと思います。姫路城と姫路駅は大成功だと思うのですが。

それと、やはり日照時間の長さです。これもやっぱり取りかえることのできないものです。皆さん、先ほどもたくさん美しい写真の中に、姫路城の夕焼け、夕日が落ちる風景がありましたね。あんな美しい夕焼けは播州でないと見られないんです。兵庫でも北のほうに行きますと山が迫りますから。ああいう、いつまでも空が赤く染まるこの季節、あの夕暮れの美しさは、今も私もたくさん絵にしますが、あれは幼いころにあの夕焼けを見て育ったから描けると思っています。

食べ物まで言うときりがありませんけど、私は帰るとき必ずアナゴを買って帰りますけれども、何もかもが満たされているところが逆に姫路の弱点の一つかなと思います。反面考えてみると、充足しますので余りほかへ行こうなんていう気が多分起こらないんじゃないかと思いますが、私のように、よそ者として一度離れて姫路を見ますと、姫路の美しさ懐かしさが胸にしみますので、会場の皆様も1回試しに二、三年姫路を離れられたら、改めてふるさとのすばらしさを実感されるのではないかと思います。

京都は、それはそれでいいところですけど、やっぱり、こちらで姫路なまりの言葉を聞くと、すごくほっとします。

ありがとうございました。

○質問者 小学生のときから美術なんか全然苦手だったんですけど、永田萌さんのお名前と写真をすごく覚えております。

○永田 萌 ありがとうございます。

○質問者 私も地元でUターンをして、改めて姫路の景観にやっと目を向けられるようになりまして、今、材木町で町家を改修してということで、いろいろ企画をしてるんですが、そこにやはり若い人たちをいかにまちづくりに巻き込むかを考えている中で、どういうことを伝えていけばいいですか、ぜひ見てもらいたいものとか、行ってほしい場所とかがあれば、ヒントをいただきたく思います。

○永田 萌 材木町のまだ残ってる景観は本当に貴重なものなので、多分美術館もそうですが、キーワードの1つに子供というのがありますが、私たち大人はそれなりに人生限られた残り時間を数えることになるのですが、子供たちは未来を担う存在ですので、やはり子供たちに町家体験、子供たちに昔の暮らしの、例えば、ちゃぶ台で御飯を食べるとか、今の子供たちにとっては日常生活ではあり得ないことだと思うのですが、可能ならかまどで御飯を炊いてみるとか、暮らし体験を京都の場合もすごく大事にしてるんで

す。

やっぱり展示したり見てもらったりする時代から、そこで何かをつくり出す、創生する時代に、美術館ももとよりですが、そういう場としての町家の魅力を若い世代の方たち、若いと言わずに、もっと若い子供さんたちを巻き込んでされるのが一つの方法ではないかなと思います。

素敵ですね。また、呼んでください。近くですから遊びに行きますので。

ありがとうございます。

○質問者 私、姫路で生まれたんですけども今、相生にいますんですけども。姫路で、お城をバックに、れんが通りというのが一番いい景色だと思うのですよ。

今度2020年のオリンピックが来ますけども、もっと外人を、お城だけ見て帰らずに、そっこのほうに運んでもらうルートを、姫路市も。もっともっとPRが私足りないと思うんですよ、せっかくのいいところを。この機会を逃すことは、インバウンドと言ってますけども、ちょっとその辺が抜けてると思うんですけども、その辺もっと具体的に、案内とかルートとか。

○永田 萌 ありがとうございます。

○質問者 坂道を上がって東のどこからすぐ帰らずに、こっちへ来るルートを。

○永田 萌 そうなんです。回ってほしいですよ。

○質問者 いいアングルがあることなんかも外人にわかるように。それはやはりPRが、もっと英語の看板をする……。

○永田 萌 おっしゃるとおりです、本当に。今、袖で市長が聞いてらっしゃると思いますが。

○質問者 それともう一つ、この姫路の西にたつこのいうまちがあるんです。あそこが、小学の6年生とか中学の3年生が町を案内するガイドを勉強しまして。

○永田 萌 いいですね。

○質問者 前に石見市長さんに言ったんです

よ。姫路はすごいと言うから、たつのを一遍見てくださいと。たつこの堀家という兵庫県で一番のがあるんですけど、そこを小学生が、「私が御案内します」と遠方から来られた方を案内しておるんで、私はその辺は姫路もお城だけやなしに美術館も案内するような、小学生からずっと育てていくということです。よろしく願いいたします。

○永田 萌 すばらしいですね。ありがとうございます。

本当にすばらしい御意見で、後ほどのシンポジウムで、もしマイクが回ってきたら言おうと思ったことをこの際に言わせていただこうと思うのですが、私はやっぱりカフェだと思うんです。

美術館にとって、もちろん展示されるすばらしい世界のメニューは重要ですが、やっぱりミュージアムカフェとミュージアムショップは。海外の方々が絶対に美術館に必要なものとして、美術館に行くならそこでゆっくりアートを見て、その後、お茶を飲もうと思われるんです。

残念ながら、姫路城の周辺にそういう場所がないのです。ですから、私はここで声を大にして、ぜひ美術館のお庭の中にミュージアムカフェをつくっていただきたいと思うんです。

そうしますと、ちょうど東のほうにおいてきていただいて、ゆっくりお城をごらんになった後の一休み、お茶を飲んだ後、次はアートというよい流れができると思います。

美術館も、これからは大人のためのアートというだけではなくて、子供さんのためのアート観賞のワークショップとかいろんなことを考えたいと思いますので、先ほど申しあげました子供さんたちの力をパワーにして頑張りたいと思います。

でも、その御意見はぜひ、もう一度市長にもおっしゃっていただいて。ちなみに、内海敏夫先生は、たつこの市のすばらしい風景をたくさん描かれております。

ありがとうございました。